



監督＝ティム・バートン／出演
 ＝ユアン・マクレガー／アルバ
 ート・フィニー／ビリー・クラ
 ダップ／アリソン・ローマン／
 マリオン・コティヤール（ソニ
 ー・ピクチャーズエンタテイン
 メント配給／2003年アメリカ映
 画／125分）

お話好きの父親が語るさまざまな「夢物語」。それを象徴するのが「ビッグ・フィッシュ」。子供時代それを受け容れていた息子は、いつしか大人に。すると……。「夢物語」派の父親と、「リアリスト」派の息子との「父子対決」は深刻だが、父親の最期に息子が語る「夢物語」とは……？ ベストセラー小説の映画化は、ティム・バートン監督自身の体験も踏まえ、父子の心温まる感動ドラマとして完成した。ラストに向けては、あちこちからすすり泣きの声か……。

♣️ ビッグ・フィッシュとは？

ビッグ・フィッシュとは文字どおり「大きな魚」だが、それだけでは何のことかわからない。しかし、「小さな池の大きな魚にはなりたくない」「小さな金魚鉢で飼うと金魚は小さいままだが、大きな空間で飼うと2倍も3倍も大きくなる」「あんたがデカいんじゃなく、町が小さいんだ」というと、何となくその暗示しているもののイメージが浮かびあがるような気がする。そして映画は、タイトルどおり、最初に巨大な魚の紹介からはじまり、年老いた魔女や身長5mの巨人が登場する。

♣️ テーマは父子の心温まる物語

主人公は、お話好きで誰からも愛される男エドワード・ブルーム（アルバート・フィニー）。今日、ジャーナリストとして活躍する息子ウィル（ビリー・ク

ラダップ)とジョセフィーヌ(マリオン・コティヤール)の結婚式であいさつをするエドワードの話は、「息子が産まれた日に釣った巨大魚」の物語。いくらチャレンジしても釣ることができなかった巨大魚を「金の指輪」をエサにして釣ることができた、つまり今日の結婚は……というオチのついた立派なスピーチだ。しかし、息子のウィルはもう耳にタコができるほど聞かされている話なのでウンザリ。しかも、今日の主人公は親父じゃなく俺だ！ そんな目でエドワードに反発するのは、息子のウィル。エドワードの語る物語は面白く、誰からも愛されている。そして、現在のエドワードを演ずるアルバート・フィニーが語っていると、いつの間にかスクリーンには若き日のエドワード(ユアン・マクレガー)が現れ、そのお話がファンタジーのように展開されていく。しかし息子は……？

そんな父子の対立と最終的に和解に至る感動を心温かく描いた原作は、1998年にアメリカで発刊されてベストセラーになった、ダニエル・ウォレスの小説『ビッグフィッシュ 父と息子のものがたり』(小梨直訳・2000年・河出書房新社)。

ティム・バートンという監督は？

パンフレットには柳下毅一郎氏の「ティム・バートンの成熟」というタイトルの解説がある。これによると、この映画を監督したティム・バートン監督は、自分自身がおばあちゃん子で、両親とうまくいかず、数年間祖父母のもとに預けられていたこともあるとのこと。その経験からか、これまでの作品では、「理解されないことによる対決」という図式が多かったのに、この作品では、父子の和解を描いている。それは、バートン監督自身が父親を亡くし、また妻との間に子供ができたせいかもしれないと分析している。

つまりバートン監督にとって、この『ビッグ・フィッシュ』の父子のストーリーは、自分自身のテーマでもあったわけだ。

考えてみれば、男の子なら大体誰でも、父親との意見の相違や対立、心の葛藤はあるもの。当然私だって……。いや私の場合はとても深刻。話せば長いことながら、いろいろと……。しかしここではそれはすべて省略。この映画で描かれる父親と息子との対立は、いろいろあるパターンの中の1つだが、いかにもファンタジックで感動的なエンディングは、後に残る息子がみんな期待する姿だろう。

荒唐無稽(?)な物語の数々

お話好きの父親エドワードは、息子ウィルの小さい時からたくさんの物語（お伽話）を話して聞かせてくれた。もっとも、父親は家にいない時のほうが多かったようだが……。そのお話は、

- ① 人が死ぬ時の姿を、眼帯に隠された目の玉に映し出すことができる魔女の物語
- ② 身長5メートルの巨人カールとの旅の物語
- ③ 美しいスペクターというまちの物語
- ④ サーカスでの、運命の女性サンドラ（若き日のサンドラ／アリソン・ローマン）との出会いと3年間のサーカスでの生活の物語
- ⑤ サンドラとの結婚に至る物語
- ⑥ 召集された軍隊での冒険話と死亡通知
- ⑦ 帰還してから、スペクターのまちの買い取り物語 など。

エドワードの病気の様態はしだいに悪化しているが、そんな中でもエドワードは、妊娠中のウィルの妻ジョセフィーンに対して、楽しくいろいろ物語（お伽話）を語っていく。しかしウィルはホントにもうウンザリ。

そして、「悪人でも、善人でもいいから、本当の父さんを見せて」と訴えるウィルに対して、エドワードは、「私はいつも、ありのままの自分でいた。それが見えないのは、お前が悪い」と回答し、父子の相違は一向に改善しないまま、ついに……。

エドワードが死亡する時の姿？

エドワードは子供の頃、魔女の眼帯に隠された右目の玉に映し出された姿によって、自分が死ぬ時の姿を知っている。そう、だからこそ、数々の冒険も恐れることなくやってこれたわけだ。しかし、エドワードはその話だけはウィルに語っていない。そんなエドワードがいよいよ危篤状態に。そしてウィルと2人だけで過ごす最期の時間、ほとんどしゃべれないエドワードは、はじめてウィルに対して「俺が死ぬ時の姿を語ってくれ」と頼んだ。しかしウィルは困惑。だって、父

親が死ぬ時の姿なんか、自分にわかるはずがない。仮にそれをリアルに語れば、「この病院の、このベッドで静かに息をひきとりました」としか語りようがないのだから。

ウィルは、自分は父親のような夢物語をする人間ではなく、現実のみを伝えるジャーナリストだと思っている人間。というより、子供の頃からの父親への反発から、ジャーナリストの道に進み、かつリアリストとして自分を訓練づけていったわけだ。

しかし、そうはいつでも、ウィルはエドワードの息子。そこで、ウィルが父親に対して縦横無尽に語った「夢物語」とは……？

会場からはすすり泣きの声が……

息絶えようとする父親に対して息子のウィルが語る「夢物語」がスクリーン上に展開される中、会場のあちこちからはすすり泣きの声が……。そして、さらに感動的なのは現実の父親のお葬式。何とここに現れたのは、あの魔女や巨人、その他父親が語った「夢物語」の中に登場した数々の主人公たちだ。『ビッグ・フィッシュ』というシンプルなタイトルが象徴する父子の対立とその和解、そして父子の心が一体となった「夢物語」が、最後にスクリーン上で繰り広げられる姿は感動的。

心温まる映画はやっぱりいいものだ……。

2004(平成16)年3月17日記